山口大学教育学部研究論叢　第73巻　107頁～116頁　2024年1月

「見る」を含む学習の系統性（6）

－源氏物語「御法―紫の上の死」－

坂東　智子*

Systematicity of Learning Including “Seeing”（6）
－ The Tale of the Genji “Minori–Death of a Woman Named Murasaki no Ue” －

BANDO Tomoko*

（Received September 29, 2023）

「御法」巻では紫の上の死が描かれている。新科目「古典探究」の教科書でも多く採録されている箇所である。高校生を対象とした授業提案も考えたが、本稿では「病」や「死」に関わることが多い看護学校での筆者自身が行った授業を対象に分析考察を行った。今回は、絵画と原文を対照させながら読むことに加えて、補助資料として「平安時代のお葬式事情」（コラム）や俵万智の文章を活用した。「時空を超えて思いを巡らす」時間としての古典の学びによって、現代を相対化する視座を得ることの意味や価値を考察した。また、受講者の「言葉自覚」「言葉の意識的な運用力」「言語化能力」を育成する「場」としての古典の学びの可能性を究明した。受験を目的としない「古典を読む、古典に親しむ」意味とは何なのか。千年も前の物語を読む必要性とは何かを検討することで、小中高大のみならず生涯教育における古典の学びの可能性を追究した。

1．はじめに

高校の授業であれ、大学の一般教養であれ、生涯教育としてであれ、そもそも受験目的以外の「古典を読む、古典に親しむ」意味や価値とは何なのか。何のために千年も前の物語を読む必要があるのだろうか。看護の専門職を志す受講生にとって源氏物語を読むことはどんな意味があるのか。看護学校で「文学と看護」の授業を担当するようになって３年目に入ったころ、それを明らかにすることは小中高大の古典教育を考える際にも、第１番目の目的を明らかにすることに他ならないのではないかと次第次第に考えるようになった。

「文学と看護」を担当し始めた同時期に、偶然であるが、オランダの言語教育について、なかでもイエナやフレネの子どもたちの生きた文脈において学ぶことを大切にする言語の教育について学び始めた。その中で、オランダの中核目標と日本の小中の学習指導要領を比較考察する機会があった。「中核目標」は、子どもたちが初等教育を終了する際に習得していることが期待されている能力を列記したものである。12項目中の９項目目に「生徒らは、彼らに向けて書かれた話・詩・情報文などを、楽しんで読んだり書いたりする。」１とある。「楽しんで読んだり書いたりする」ことは、習得していることが期待される言語能力だと明記されている。これが全てのベースになることは間違いない。「楽しんで」ではなく、やらなければならないから、仕方なく読んだり書いたりする、そういう習慣が身についてしまえば、より質の高い言語能力の育成といっても、それはお題目に過ぎなくなる。当たり前のようでいて、「古典の学び」においてもしかり、極めて根本的な、とても大切な能力だと再認識した。

簡単に結びつけた訳ではないが、源氏物語をつまりは古典を「楽しんで読んだり書いたりする」経験は、看護学科の生徒さんにとっても意味のある学びとなるのではないか。大学の一般教養の授業で源氏物語を読む楽しさを「再発見」することを目的として、源氏絵と原文を対照させながら、絵画を補助資料として用いるのではなく絵画でなくては語れないものと文字によって語るものを行き来して読むことを始めた初心に立ち返る思いがした。

本研究はこれまで、国語科における言語化能力と連動する「見る」力の系統的な育成と、現行教科書教材を用

＊ 山口大学教育学部，〒753-8513　山口市吉田1677－1，t.bando@yamaguchi-u.ac.jp

いた小中高大の系統性を意識した「見る」を含む授業提案を行ってきた。看護学校の授業でも、「見る」力の育成と豊かな言語生活を生み出す「言葉」そのものを生み出す力としての「言語化能力」の育成を目指していることは同様である。あえて付け加えるならば、現在と源氏物語の時代との違いを考えるための補助資料を用いて、より現代を相対化することを意識的に行ったことである。

そこで本稿では、筆者自身が授業者である県立萩看護学校第二看護学科「文学と看護」（令和４年度、生徒数18名、全30時間）の実践を対象として取り上げ、看護師を目指す受講者にとっての「源氏物語」つまりは古典を学ぶことの意味や意義を考えていく。最初に講義概要を示し、次に「紫の上の死」を対象とした授業の内容と用いた視覚的資料、解説の文章、ワークシート、受講者のコメント分析、その考察結果を示す。それにより、看護師を目指す受講者にとって「源氏物語」つまりは古典を読む意味や意義、絵を用いた効果を検討する。

２．教科書教材としての「紫の上の死」

本研究ではこれまで高等学校教科書「古典Ｂ310 古典Ｂ 古文編」（大修館2014）採録の箇所を主に取りあげてきた。理由は、竹取物語や伊勢物語、更級日記等の採録箇所と源氏物語との影響関係が見えやすいからである。源氏物語では、「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見の間に藤壺入内の経緯を挟み込む構成であり、中盤、終盤に「葵」「須磨」「薄雲」「若菜上」「御法」「橋姫」を採録している。北山での出会いから紫の上の死までの生涯が概観できる。令和５年度からの新科目『古典探究』の教科書では、大修館の新『古典探究古文編』『精選 古典探究』はともに「紫の上の死」を採録している。また、三省堂『精選 古典探究 古文編』や東京書籍『新編古典探究 古文編』にも「萩の上露」として同箇所は採録されている。高校生を対象とした授業を提案することも可能であるが、今回は県立萩看護学校で筆者自身が行った授業を主な考察対象とする。理由は、受験を目的としない「古典の学び」の意味や意義を明らかにするためである。

３．「文学と看護」（山口県立萩看護学校）

３．１　実践の概要

（１）授業名：山口県立萩看護学校「文学と看護」

（２）実施時期：令和４年４月18日～９月21日（全30時間）

（３）対象：第２看護学科27期生18名（２年）

（４）目的：文学作品を通して、自然の美しさや人の心の機微を感じるとともに、人間に対する理解を深め、豊かな人間性を培う。

（５）目標：古文の内容を絵画や現代語訳、関連する文章とともに解釈鑑賞することによって、時代を越えて変わらない親子の情や人の心の機微を感じるとともに、人間に対する理解を深め、豊かな感性を養う。

（６）講義内容

第１回　源氏物語とは、高麗人の予言
第２回　桐壺帝の逡巡、臣籍降下
第３回　形代、桐壺更衣と藤壺
第４回　形代、藤壺と若紫
第５回　藤壺と伊勢斎宮の和歌
第６回　皇子の誕生
第７回　須磨の秋
第８回　須磨から明石へ
第９回　光源氏と女君たち
第10回　紫の上と明石の君
第11回　紫の上の物語
第12回　紫の上の遺言
第13回　紫の上の死
第14回　紫の上の死を悼む
第15回　試験

（７）講義資料：毎回投影資料を印刷して配布。参考資料は適宜配布。

（８）参考資料

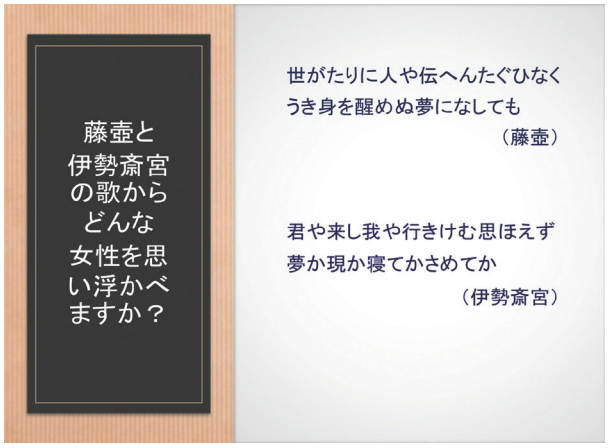
①週刊朝日百科『週刊絵巻で楽しむ源氏物語五十四帖』全60巻、朝日新聞出版社、2001。
②『源氏物語悠久の舞台をめぐる』（DVD）京都新聞出版センター
③佐藤浩司『雅楽源氏物語のうたまい』（DVD付）道友社、2012。
④香老舗松栄堂広報部編『王朝の香り 現代の源氏絵とエッセイ』青幻舎、2002。
⑤大和和紀『あさきゆめみし』講談社、1993。
⑥俵万智『愛する源氏物語』文藝春秋社、2003。

（９）授業の進め方

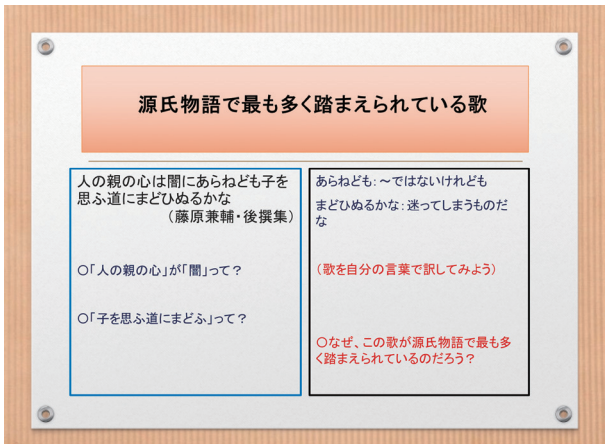
①毎回今日の源氏絵を提示する。
②人物関係図や地図等の視覚資料を適宜用いる。
③前回のコメントからいくつか取りあげ、感想や質問に答える形で授業を進める。
④毎回、作中和歌を紹介する。時には、和歌から作者像を捉える。引用された和歌から、先行作品との関係を解説する。
⑤毎回、２～３行ほどの原文をノートに視写してもらい、音読の後、解説する。
⑥適宜、登場人物になりきって「つぶやき」を行ってもらう。（全員が一言ずつ「つぶやく」）
⑦班ごとの話し合い、班で出た意見の発表を行う。
⑧コメントを記入し提出する。

（10）取り上げた和歌の一部

第５回　藤壺と伊勢斎宮の和歌（投影資料より）

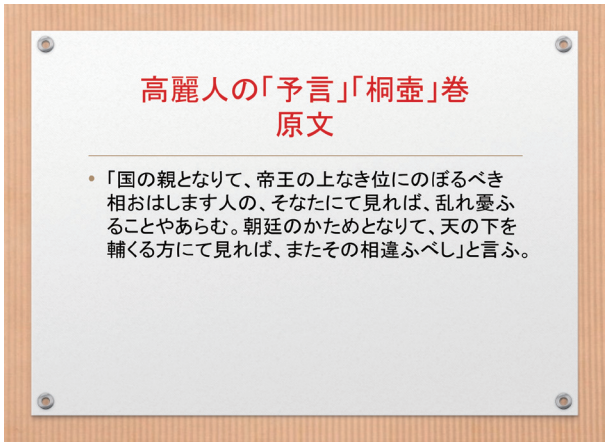


第10回　紫の上と明石の君

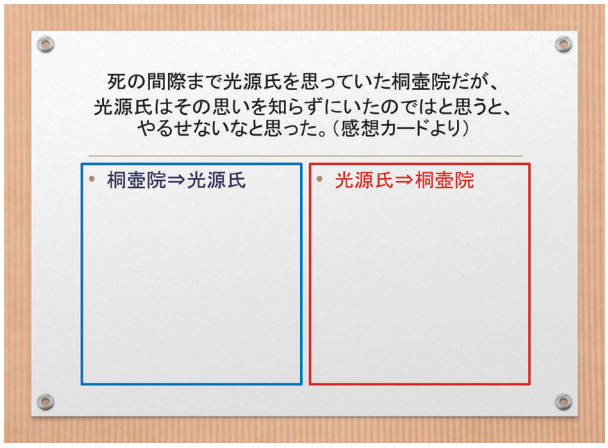


（11）視写した原文の一部

第１回　高麗人の予言（投影資料より）



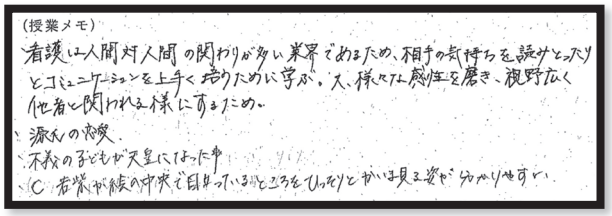
（12）コメントから授業をはじめる



３．２　初回コメントから

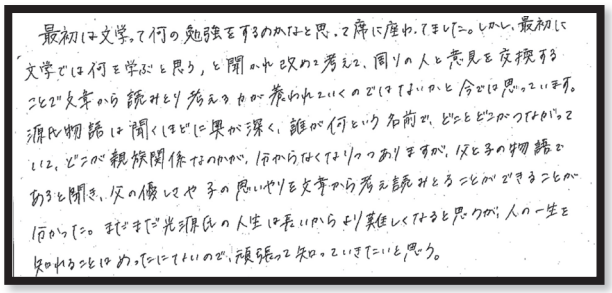
―「文学って何を学ぶと思う？」―

初回授業の最初に、「文学って何を学ぶと思う？」と問いかけ、個人で考えてもらってから周りの人と話し合いを行った。上の授業メモには、「看護は人間対人間の関わりが多い業界であるため、相手の気持ちを読みとったりとコミュニケーションをうまく行うために学ぶ。」とある。受講者の多くが、「相手の気持ちを読み取る、感性を磨く、視野を広げる」ためとコメントしている。源氏物語については、習った記憶はあるが、内容はよく覚えていない、恋愛ものかな？といったコメントがほとんどであった。


（授業メモ）
看護は人間対人間の関わりが多い業界であるため、相手の気持ちを読みとったりとコミュニケーションをうまく行うために学ぶ。人、様々な感性を磨き、視野広く他者と関われる様にするため。
・源氏の内容
・不倫の子どもが天皇になった中
・C：若紫が彼の中央で目をつぶっているところをひっそりとかいま見る姿が分かりやすい。

第１回の授業メモ①

個人で考えた後に、他の人と意見交換をすることで、「文章から読みとり考える力がやしなわれていくのではないかと今は思っている。」と「文学と看護」の授業を受ける目的意識が明確になったと記した受講者もいる。考えてから話し合い、受講後に振り返りを書くという流れが、思考のプロセスを辿り自己の変容の結果を書くことで捉え直すという思考過程を生成していることが分かる。


最初は文学って何の勉強をするのかなと思って席に座わってました。しかし、最初に「文学では何を学ぶと思う」と聞かれ改めて考えて、周りの人と意見を交換することで文章から読みとり考える力が養われていくのではないかと今は思っています。源氏物語は聞くほどに果が深く、誰が何という名前か、どことどうつながっているとか、どこが親族関係なのかが、何からなくなりつつありますが、父と子の物語があると聞き、父の優しさや子の思いやりを文章から考え読みとることができることが分かった。まだまだ光源氏の人生は長いからより難しくなると思うが、人の一生を知れることはめったにないので、頑張って知っていきたいと思う。

第１回の授業メモ②

３．３　第13回「紫の上の死」の授業の実際

（１）提示した源氏絵

第13回で用いた源氏絵は、国宝「源氏物語絵巻」御法段（五島美術館蔵）の復元模写（徳川美術館イメージアーカイブ＋）である。現存する国宝の絵も投影したが、色落ちが激しいため、制作された当時の色彩に近く、人物や背景がわかりやすい復元模写も併せて紹介した。

「源氏物語絵巻」御法　復元模写　桜井清香　1963年徳川美術館蔵　（徳川美術館イメージアーカイブ＋）

（２）参考資料

① 俵万智『愛する源氏物語』「紫の上」（pp.190-197）、文藝春秋社、2003。

② 「平安の大事典」第43回平安時代のお葬式事情　週刊朝日百科『週刊絵巻で楽しむ源氏物語』、2001。

（３）授業の流れ

① 導入：「御法」巻冒頭原文の視写を行う。

> 紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、そこはかとなくなやみわたりたまふこと久しくなりぬ。

看護学校の生徒さんが対象であるため、高校の教科書には採録されていない「御法」巻冒頭原文をあえて視写してもらい、「わづらひ」「あつしく」「なやみ」などの語から紫の上の病状がすぐれない状態が長く続いていることを理解してもらった。同時に、「若菜上」で六条院が完成したこと。「若菜下」で女三の宮らと女楽の宴の夜に紫の上が危篤におちいったことを説明した。

光源氏の屋敷ー六条院（宇治市源氏物語ミュージアム）

> 夏になりては、例の暑さにさへ、いとど消え入りたまひぬべき折々多かり。（中略）さぶらふ人々も、いかにおはしまさむとするにか、と思ひよるにも、まづかきくらし、あたらしう悲しき御ありさまと見たてまつる。

夏の暑い時期に、紫の上の体力は目に見えて衰えていく。高校教科書には掲載はないが、８月末の講義であったことと看護の学生さんであることも考え合わせて原文を提示した。明石の中宮が紫の上を見舞うため二条院を訪れる。そこで中宮は、紫の上の死期が近いことを直感する。明石の中宮は幼い時から紫の上に養育されて、自らの皇子や皇女も紫の上が大切にお世話をされてきた。継母ではあるが、紫の上は遺言とは気づかれないよう言葉を選びながら明石の中宮に後事を託すのである。本来ならば、紫の上と明石の中宮の関係性と心の通い合いを知るためには教科書に掲載したい箇所である。抜粋ではあるが、看護学校の授業ではここを取り上げた。

次からが高校教科書に採録の原文である。

> 秋待ちつけて、世の中すこし涼しくなりては御心地もいささかはなやぐやうなれど、なほともすればかごとがまし。さるは身にしむばかり思さるべき秋風ならねど、露けきをりがちにて過ぐしたまふ。
>
> 中宮は参りたまひなむとするを、いましばしは御覧ぜよとも聞こえまほしう思せども、さかしきやうにもあり内裏の御使の隙なきもわづらはしければ、さも聞こえたまはぬに、あなたにもえ渡りたまはねば、宮ぞ渡りたまひける。（後略）

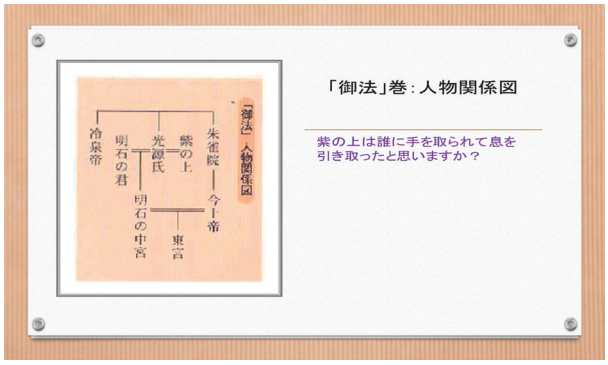
「秋待ちつけて」「涼しく」「秋風」「露けきをり」といった表現が季節の移り変わりとともに、紫の上の死期が近づいていることを知らせている。ここでも紫の上と明石の中宮の心の通いあいと、互いの気遣いが描かれている。紫の上は、中宮を引き止めたい気持ちはあるが、中宮の身分を考えると僭越かと考えて伝えられずにいる。衰弱して紫の上から中宮を訪ねることが難しいため、異例のことであるが中宮が紫の上の居室（西の対）を訪れる。身分社会におけるそれぞれの心配りと身の処し方が表現されている。ここを丁寧に読んでおくことで、紫の上の限り（臨終）に中宮が手を取り立ち会えた深い縁が納得される。

② 発問１

「御法」巻人物関係図を示し、「紫の上は誰に手を取られて息を引き取ったと思いますか？」と問いかけた。

「源氏物語絵巻」御法も参考にして考えてもらった後、紫の上、光源氏、明石中宮の和歌の解釈にはいる。

次頁人物関係図は、大修館「古典B310 古文編」（H25）「御法」巻冒頭に掲載されたものである。関係図に記された登場人物の中から考えてもらった。



「御法」巻人物関係図（大修館「古典Ｂ310」Ｈ25）

③「光源氏、紫の上、中宮が和歌を詠み交わす」

高校の授業ではここがメインとなる箇所である。３人の和歌の解釈を丁寧に行うところであろうが、萩看護の授業では、歌の解釈は俵万智さんの『愛する源氏物語』「紫の上の死」をプリント配布して読んでいった。詳細はコメントの分析とともに後述する。

④　紫の上の死（原文）

（紫の上）御几帳ひき寄せて臥したまへるさまの常よりもいと頼もしげなく見えたまへば、「いかに思さるるにか」とて、宮は御手をとらへたてまつりたまふに、まことに消えゆく露の心地して限りに見えたまへば、御誦経の使ども数も知らずたち騒ぎたり。さきざきもかくて生き出でたまふをりにならひたまひて、御物の怪と疑ひたまひて夜一夜さまざまのことを尽くさせたまへど、かひもなく、明けはつるほどに消えはてたまひぬ。

宮も、帰りたまはで、かく見たてまつりたまへるを、限りなく思す。（後略）

紫の上は、明石の中宮に手を取られて息を引き取る。中宮は宮中に帰参しないまま紫の上の臨終に立ち会えたことから、深い因縁とお思いになる。紫の上の最期は、「明けはつるほどに消えはてたまひぬ」と表現されている。中宮が紫の上の様子を「まことに消えゆく露の心地して」と臨終の時が近いことを悟られた言葉と呼応する。源氏物語の女性の最期の表現がそれぞれ異なっていることについては後に気づいてもらった。

⑤　死の直前の紫の上の思いを、紫の上になったつもでつぶやく。

⑥　コラム「平安時代のお葬式事情」を読んで、紫の上の死の迎え方が平安時代の貴族のそれとは異なっていることに気づく、作者の意図を考える。

３．４　受講者の反応分析

ワークシートの記述から（抜粋）（下線は発表者が付記した）

Ａ紫の上は幸せだったと思いますか？

	選択	理由
1	幸せだった	実の子ではないけれど娘ができ、その娘に看取られて逝けたから。
2	幸せだった	子だからには恵まれなかったが、養女として明石の君と源氏の子どもの明石の中宮を娘として育てることができたし、最期は、大切に育てた娘に手を取られて亡くなったから、最期まで幸せだったと思う。
3	幸せだった	天皇の奥さんは制限もあり毎日大変だったと思うが、その中で光源氏と結ばれ、子どもが産まれた。女の子には恵まれなかったけど、明石の中宮を育て娘のように慕われたから。
4	幸せだった	人生色々あったけど娘（明石の中宮）に看取られ亡くなることができたから。
5	幸せだった	散々光源氏に振り回されて辛い思いをしてきたけど（女としては）、最終的には育てた娘が母を思い寄り添ってくれた（母としては）。
6	幸せだった	浮気とかされて色々大変だけど、好きな人と一緒に居ることができている。また、子には恵まれなかったが、可愛い明石の中宮もいるのでよい。また、体調が悪い時は好きな人から心配、お仕えする女房達も心配されていたから。
7	幸せだった	紫の上に子どもは出来なかったけど、明石の中宮が娘として来てくれて、一緒に暮らせて、最期は見守ってもらえていたから、人生としてみると幸せだったのではないかと思う。
8	幸せだった	いろいろな大変なことがあったと思うが、光源氏に愛されていた。誰かに愛される人生は幸せだったのではないかと思う。一人で亡くならずにそばについていてくれる人がいた。
9	幸せだった	最期に明石の中宮に看取ってもらえたから。
10	幸せだった	光源氏の妻。苦労もあったけど、光源氏は太上大臣になったので、後半良い生活ができたのでは。
11	幸せではなかった	ひとりさみしい身の上だったが光源氏と出会い、都へ行き、心苦しく、明石の中宮という娘をもてたが、出会わなければ病になることはなかったのかもしれない。

12	幸せだった	身寄りもなくさびしい思いをしていた幼少期から源氏から愛情を受け取り大切にされ育ち、子がいなかったけれど、自分を母として慕ってくれて、大切にしてもらえ、最後みとってもらえたから。
13	幸せだった	小さい頃の境遇は孤独であり、源氏には愛人がいて、自分には子どもができなかったけど、明石の中宮を引き取ったことで、一緒に過ごす時間は何よりも大切だったと思う。
14	幸せだった	少女の時に母親を亡くして、光源氏に引き取られてふりまわされることもあったが、実の娘ではない明石の中宮を育て最後には看取ってもらえた。一人きりの人生ではなかったから。

B紫の上、光源氏、明石中宮の歌について（死の直前）

（紫の上）おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露

・はかなさは私の命と似ています風に乱れる萩の上露（万智訳）

（光源氏）ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先立つほど経ずもがな

・ともすればはかない露のような世にあなたに後れて生きたくはない（万智訳）

（明石中宮）秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草場のうへとのみ見ん

・秋風に散りはててゆく草露のさだめはひとごとならず誰にも（万智訳）

1	血のつながりはないけど、親子（母、娘）で、家族であるというつながりを表して、家族として送り出す感じ。
2	通常の亡くなり方とは違い、歌で伝え合いながら、導かれていった。 源氏と明石中宮に苦しい姿を見せて亡くなるのではなく、最初の登場から、美しい紫の上であったように、最後の最後まで、いつもと変わらない美しい亡くなり方をする。
3	言葉で直接伝えると、感情的になったり、現実的になってしまうので、歌で死を優しく伝えたのでは。物語なので、読み手に想像させるように歌にしたのではと感じた。光源氏は現実を理解できていない様子である
4	紫の上らしい最期。死をかた苦しい儀式にしたくなかった。
5	最期っていう最期にあまりしたくなかった。
6	この時代の死＜通常＞仏像から５色の糸を引いて、極楽浄土の世界へ連れてってくれる。 （３人）気持ちの確かめ合い（死に対して） （紫の上）光源氏の死ぬっていっているから、死として、極楽浄土へは行かず、２人に寄添い続けるよという意味を込めて。⇒まだ光源氏は死を受け入れることができない。
7	３人で過ごしたという空間を最後の思い出として旅たっていってほしかった。３人だけで何か一緒のことをしているため、本当の家族のように思わせる空気感だったと思う。３人の思いを１つに。
8	（平安時代）仏像から５色の糸を手に持って念仏を唱えながら亡くなる。 紫の上は、すぐそこに死がせまっており最期の時を共有している状態だと思う。それぞれが様々な思いを抱えていると思うが、その思いを歌にしてお互いに伝え合うというのは、今でいうと、もう意識がもうろうとしているような家族へ最期の言葉かけをしているような感じだと思う。この物語のとても複雑な人間関係や登場人物それぞれの気持ちの変化を丁寧に書かれている作品だと思うので、死の瞬間の儀式的なことよりも３人の気持ちを重点的に書かれていると思った。 最初の頃の熱い思いはお互いになくなって、少しずつ気持ちが変化し、最期の歌は、はかない印象の「露」という表現になったのかなと感じた。紫の上は光源氏に対し、熱い思いはなくなったとしても、一緒に過ごしてきた良い思い出や家族愛のような気持ちを込めて最期の歌を送ったように思う。
9	・５色の糸を手に持ち、極楽浄土をとげる 歌を通して想いを伝えた。最期っぽくしたくなかったんだと思う。３人の気持ちを大切にしていると思う。（３人の時間）
10	死の迎え方、看取り 死の間際という感じがしないと思った。病気になった人とそばにいる人たちの歌ではあるが、まもなく死ぬ段階での歌という感じはしない。紫の上は死ぬ時まできれいな印象。
11	通常の臨終の場との違い儀式的なものを入れなかった理由 紫の上がずっと言いたかった気持ち、心情を現わす場面、死というものを他とは違う、特別な表現とするため、死を受容している紫の上と、残される人との心情の違いを表わしている？

12	紫の上は、自分が死んでしまうのをわかりながらも、光源氏のことを思っている。光源氏ありきの人生だった。それを表している。思いをお互い伝えている。本当の家族ではないけど、家族としての最期を迎えている。死を寂しくないようにしている（紫の上は色々我慢もしてきたから）
13	（五色の糸を手に持って極楽往生をとげられる） 血はつながっていなくても家族だから最期のときは家族だけですごしたいとの思いから、三人で歌をうたい思い出として残す。今は明石の中宮がいて1人ではなかったが、小さい頃から、周りの身内などが亡くなり、孤独を背負って生きてきた紫の上に、人生の最期まで孤独感を思い出してほしくなかったから３人で一緒にすごした。大切な家族と一緒にすごす時間。歌→思いを伝える会話をする。
14	・死を連想させるような儀式が光源氏にできるか・光源氏の心の準備のため・悲しんでほしくなかった　極楽浄土に行けるような儀式をすることよりも、紫の上が残していく２人が心配で歌を送ることが紫の上や光源氏にとっては会話のようで自分の思いを一番伝えられることだったから。

C死の直前の紫の上の思いを、紫の上になったつもりでつぶやいてください。

1	私は先に逝くけど、悲しまずに生きてね。あなたたちに看取られて逝けるなら悪くないかな。
2	紫の上自身２度も、光源氏に浮気され、さんざんふりまわされてきて、私の人生こんなに辛いのか、自由になれないものなのかと何度も思った人生であったけど、私のこの死で、あなたも私も自由になれるのね。
3	色々なことがあったけれど、私にとっては幸せな人生だった。
4	濃い人生だったなーこれが私の人生だったのね
5	ありがとう。すきでした。
6	最後まで私を心から愛してくれたのかな。何かかなしいな。我慢してばかりだった。でも私もやっと楽になれるかな。
7	あなたの悪業、私は全て知っています。でもあなたがいなかったら私は娘と会えなかった。ありがとう。幸せになって下さい。
8	空欄
9	空欄
10	最期は光源氏がそばにいてくれてよかったなー。孤独な死ではない。
11	貴方は哀しむでしょうが、大丈夫でしょう。私は今、とても清清しい。
12	ずっとあなたに尽くしてきた。この先が心配。私がいなくなってあなたは大丈夫なのか。
13	元気でおすごし下さい。明石の中宮をこれからも大切に育てて下さい。
14	次は自分のために生きたい

D（振り返り）

1	紫の上の死の場面は現代の家族の看取りの場面と似ているのかなと思いました。
2	死の直前までも、紫の上のやさしさが、こめられている亡くなり方になっていて、人間性がすごく書き出されている話だと思いました。「あなたも私も自由になれる」と思っているのかもしれないけど、源氏と娘との家族がはなればなれになるさみしさも、かかれていると思いました。
3	紫の上の死を前にして、リアルな心情が描かれていると思った。須磨に行く時の女性の心、離れたくない気持ちが表れているし、女三の宮のもとへ通う時は、あきらめのようにも感じる。色々と苦労したけれど、明石の中宮の存在が大きかったと思うし、紫の上にとって一番の理解者だったように感じた。
4	現代の死の迎え方とは全く違いびっくりしました。
5	すごく難しいですが、様々な考え方を知ることができるので、様々な角度で考え、視野を広げることのできる物語だと思いました。男女の愛よりも、親子の難しさや大切さを感じることが出来る物語だとも思いました。
6	紫の上という女性は本当に人思いで最期まで心温い人だった。人として十分にできたひとだと思った。私だったら、恨みに変わりそうな所を、そぶりが一切なく、そういう所が皆から愛されることに繋がっているのかなと思った。私も紫の上みたいに、お上品に心まで綺麗になりたいです。光源氏みたいな男の人にはつかまらないようにしようと思う。

7	紫の上は沢山苦しい思いもつらい思いも光源氏によって感じる人生だったと思う。しかし、娘が最後をみとってくれるなど人生の最後の場面としては幸せな時間だったと思う。強く優しく、周りをしっかり見てる人だからこそ最後まで光源氏へ優しく警告をしたりと性格が最後の最後まで出ていると思った。天国ではもっと自分の幸せだけを思って天国で暮らしてほしいと思った。
8	空欄
9	紫の上は最後まで、光源氏のことを想って歌をうたっていたんだということが分かりました。
10	平安時代の女性の生き方を知らないので、紫の上の思いを理解することが難しかった。今の時代のように、男女差なく女性も意見を言える時代ではないだろうけど、紫の上も自分の人生や生き方を考えてはいたのかな、と考えることができた。
11	紫の上がずっと光源氏の理想でありつづけた事が本当は苦しかったのではないかと感じた。普通を知らず、少女のまま都で暮らすことになった紫の上が、幸せだと感じられたことがどんなこと、どんな時だったのか、知りたいと思った。
12	紫の上の人生が幸せだったか、不幸だったかは、正直わからない。どらえ方次第なのでわからないが、光源氏にふりまわされて、光源氏ありきの人生ではあったが、結局は紫の上も光源氏なしでは生きていけなかったと思う。紫の上は思いやりがあり、優しく強い女性であるというのが、死の場面までよくえがかれていると思った。
13	改めて紫の上は優しくて心が広く、強い女性だと感じました。私が紫の上だったら、光源氏のことを嫌いになるしうらむと思います。上記のつぶやきは、ありがとうとは言わないでほしいという私の勝手な思いで考えてつぶやきました。出会ってから光源氏に裏切られ、散々傷つけられたのだから元気でねくらいの言葉で十分だと思いました。出家できず、死が光源氏から解放されるということを聞き、そういった考え方もあると思ったのであえてありがとうや愛情を伝える言葉は選びませんでした。
14	最後の最後まで紫の上が幸せだったのか、そうでなかったのかが分からなかった。光源氏が引き取らなければ１人で生きていくことになっていたかもしれないと思うと良かったのかもしれない。しかし、光源氏が愛したのは自分だけではない。正妻の座も追いやられて結局１人のような日々を送っていたかもしれないと思うと、その時の紫の上の気持ちが知りたいと思った。

３．５　考察

①源氏絵を用いた古典の授業方法について

・学習者の記憶（既習事項）のリコール

毎時、今日の源氏絵を提示したことにより、場面の全体像を捉えることが容易になった。既習の場面との繋がり、人物関係についても、提示した源氏絵（例えば、「北山での垣間見」「須磨」「明石の姫君を引き取ったころ」）を手掛かりに、学習者の記憶（既習事項）がリコールされた。複数の源氏絵を併せて見返すことで、アニメーションを見ているかのような作用が生まれ、時間的な流れに添った物語の再生が可能になった。

・源氏絵から書かれてないことまで推測しながら読む

一枚の源氏絵を見るだけでも、多くの情報を得ることができる。例えば、構図や人物の配置、姿勢、表情、背景、描かれている景物から季節や場所、人物の心理的なものなど。これと原文（現代語訳）を対照させながら読むことで、絵画と言語作品を相互作用させながら、書いてあることから、書かれてないことまで推測しながら意味生成し、自分なりに解釈しながら読むことが可能となった。

②「源氏物語」の作中和歌について、和歌を毎回取りあげることについて

・源氏物語の表現形式と内容の関係

毎回、作中和歌を紹介し、時には和歌を手掛かりに和歌の作者像を考える活動を行った。また、引き歌なども適宜紹介した。このことで、源氏物語の表現形式と内容との関係について考えることが可能になった。古今集をはじめとした和歌世界との関係や先行する古典作品の影響など、知識としての文学史理解ではない理解の場が生まれた。

・俵万智さんの現代短歌訳による和歌の理解

和歌は技法などを詳しく説明すればするほど、かえって理解が難しくなる所もあるが、例えば今回の俵万智さんの文章や現代短歌訳を示すことで、和歌の理解がしやすくなった。

③時代背景や風習・行事等の文化的背景を知ることについて

・現代と比較する思考の流れが自然に生まれる

人物関係図や地図などの視覚的資料を用いることと、今回のように、「平安時代の臨終の迎え方」といった平

安時代の風習や習慣、行事等について解説した資料を用いることで、現代の臨終場面と比較する思考の流れが比較的自然な形で生まれやすくなった。

④判断型課題（幸せだった・幸せではなかった）
・どっちかなと考えるプロセスが生まれた

最後の振り返りにもあるように、(D-12,D-14) のように、「最後の最後まで紫の上が幸せだったのか、そうでなかったのかが分からなかった。」という記述も複数みられた。単純にはどっちかっていえないよねと迷う姿がみられた。(A-5)「散々光源氏に振り回されて辛い思いをしてきたけど（女としては)、最終的には育てた娘が母を思い寄り添ってくれた（母としては)。」と分析的に場合分けして理由を書いたものもある。「どっちかな」とこれまでの学習を振り返り、統合して判断する、つまりは考えるプロセスが生まれたことは確かである。

⑤補助資料を用いることについて

これは、メリットとデメリットの両方がある。どうしても、参考資料の見解に影響されてしまうことは避けられない。正解ではないよ、1つの考え方、読み方だよと念をおしていても、自分で考えるよりも先に、資料を読んで、線を引いて、それをコメントカードに引用してしまうこともある。

⑥時代背景、風習や文化についての補助資料の選択について

背景を知ることは物語理解にとっては不可欠だと考える。現代を相対化することにも繋がる。読みやすいが偏りのない、良い資料を用意する必要がある。

⑦「つぶやく」(○○になったつもりで一言つぶやく）という課題について

このクラスでの恒例の「問い」となった。最初はなかなか難しかったが、とりあえず一言という感じで全員に発言してもらったところ、「えー」とか「うーん」とか結構な反応があり、みんなも面白がってやってくれるようになった。が、正直「つぶやく」って難しいし苦痛だったという人もいた。

⑧話し合いについて

このクラスは３年間固定メンバーで、18名と少人数であったため、コメントカードを持って楽しそうに話し合いを行っていた。また、班ごとの発表を聞いて、自分たちとは違う感じ方や考え方が出ることも多かった。「つぶやく」につていも、他の人のつぶやきを聞いて、そうか今回はそれを貰おうというような感じで乗り切ってくれたが、ハードルを少し低くする声かけも意識的にする必要がある。

４．おわりに

看護学校の生徒さんにとって「古典を学ぶ、古典で学ぶ」ことの意義とはどのようなものであろうか。「時空を超えて思いを巡らす」時間が生まれ、現代を相対化したり、かえって親子の情や、人の思いといった時代を超えても変わらない人間の普遍的な側面にきづくことだと考える。兼好法師がいう「見ぬ世の人を友とする」ことができるのが、古典を学ぶ、古典を読むことである。文法や正確な現代語訳も必要ではあるが、広がりのある世界を知っている、知った喜びは、貴重だと考えた。コメントシートの記述には、自分に引きつけて古典を楽しんでいる、古典で考えを巡らせている様子が表れている。

古典の内容を理解するだけでなく、言語表現、言語形式と内容の関係に目を向け、自分自身の表現、言葉選びにも自覚的になり、なぜその言葉を用いたのかを、言語化して説明する、「言葉自覚」「言葉の意識的な運用」つまりは「言葉の力」そのものを育成する場となっている。

留意すべき点は多数ある。現代の啓蒙書や解説した文章を補助資料として用いる時には、まずはどの資料を用いるかの選択が重要である。また、提示する際の指示の出し方によっては、参考資料の解釈や見解が正解と受け取られてしまいかねないことである。自分で考えるための補助資料であることを、丁寧に伝える必要がある。今回は、和歌の解釈に俵万智さんの現代短歌訳を用いた。和歌は、全てを言葉にして表現することは難しい、いわく言い難い思いに形を与え、読み手が和歌の表現や技法から思いを汲み取って理解する表現形式である。技法や語句の意味を詳細に説明するのではなく、和歌の形式はそのままで、現代短歌訳されたものから、読み手が想像したり思いを汲み取ることで、読み手それぞれの解釈が生まれ、再構成することが可能になったと考えている。

視覚的資料を用いるだけでなく、啓蒙書や解説書などを活用して、読み手の現在とも関わる古典の学びにすることが必要であると痛感した。

引用文献

秋山虔監修：週刊朝日百科『週刊絵巻で楽しむ源氏物語 五十四帖 四十帖御法』「源氏物語絵巻」復元模写、朝日新聞出版社、20、2001。

阿部秋生他：古典セレクション　源氏物語＜全16冊＞小学館、1998。

一色恵理：「源氏物語」教材化の調査研究、渓水社、2001。

河添房江：復元模写から読み解く「源氏物語絵巻」と

『源氏物語』―「夕霧」「御法」「東屋（二）」を中心に―、『國語と國文学』（東京大学国語国文学会）、至文堂、pp.2-12、2006a。
佐野みどり：じっくり見たい『源氏物語絵巻』、小学館、24、2000。
田近洵一監修：『絵で読む日本の古典②源氏物語』、ポプラ社、45、2012。
原岡文子：教科書の『源氏物語』「若紫」垣間見小考―教材化の史的変遷、そして史的文化状況の中の受容、『愛知県立大学説林』(65)、愛知県立大学国文学会、27-33、2017。
坂東智子：「見る」を含む学習の系統性（１）―漢字教材を中心に―、『研究論叢』第68巻、山口大学教育学部、181-190、2019。
馬淵和夫他：古典Ｂ310 古典Ｂ 古文編、大修館書店、2014。
三田村雅子・河添房江：描かれた源氏物語「源氏物語絵巻」と物語の《記憶》をめぐる断章（河添房江）、翰林書房、50-55、2006b。

注

１）リヒテルズ直子翻訳（2021）『オランダのイエナプランスクール及びフレネスクールで推奨されている言語教育法DATplusの第１章イントロダクション（方法の意図と背景の説明部分）』（出版前版）

【附記】本研究は、2019年度科学研究費補助金（基盤研究（B））（課題番号19H01670）による。